

〔話題〕

千葉大学の医学古書と眼科史

千葉 彌 幸

(1996年11月22日受理)

はじめに

日本眼科学会は明治30年2月に臨床医学系で最初の学会として創設され、平成8年5月に京都国際会館において創立百周年記念式典が盛大に開催された。会場には歴史展示のコーナーが設けられ、全国から眼科の古書をはじめ、検査器具、手術道具、眼鏡、点眼瓶など多くの貴重な史料が集められ展示された。その中に千葉大学医学部眼科学教室で所蔵している古医書と器械類も何点か出展することになった。筆者は日本眼科学会から依頼を受け、展示品の選定と解説を担当する委員の一員に加わった。この時、千葉大学附属図書館発行の「医学古書目録予備版」および眼科学教室発行の「千葉大学医学部眼科学教室所蔵 東洋医学眼科関係古書目録」を参考にして選定し、他の施設から借用した古書とともに展示し、大きな反響を呼んだ。眼科関係の古書は、昭和14年5月に伊東彌恵治教授のもと、千葉医科大学で開催された日本眼科学会の時[1-3]や、昭和31年4月に開催された日本眼科学会創立60周年の折[4]などに展示されてきた。今回貴重な古書や器械などが再び人目に触れることとなり、あらためて歴史的資料の保存が注目される所となった。

千葉大学医学部には眼科学教室の故伊東彌恵治教授らの御尽力により、皇漢医書を中心に他の分野のものも含めて数千冊におよぶ貴重な古書が収集されている[5]。これらは千葉大学附属図書館亥鼻分館に「東洋医学古書コレクション」として保管されており、平成6年には、その一部を「日

本近代科学の黎明～蘭学」として、資料展が開催された[6]。この度、亥鼻分館が新築され、日本医学史を語るには不可欠といえるこの古書コレクションの保管もようやく整備されることになった。この機会に、本学の古書の紹介を兼ねて、古代から幕末に至る日本眼科史を概説する。文中『』で示した書籍は前述の目録に掲載されているものである。

日本眼科史については、富士川、小川、福島ら各氏の著作があり[7-9]、日本眼科学会でも創立百周年記念誌の出版が予定されている。本稿はこれらの著書を参考にさせていただいたもので、詳細はそれを参照していただきたい。なお、本学の古書コレクションの中には小川劍三郎氏が所蔵していた時のカードが貼付されている本も含まれており、感慨深いものである。

漢方医学の時代

古代の日本では、大陸との交通が盛んになるに従い、外来の医学の影響を受け、仏教の伝来とともに仏教医学の色彩が濃くなっていった。室町時代末期になり明に留学した僧医などが、金・元時代に体系づけられた中国医学を習得してわが国にもたらし、当時の時勢に適応して日本の医学として独自に発展するようになった。田代三喜や曲直瀬道三らによって広く伝えられた金・元医学の流れをくむ一派は後世派とよばれている。江戸時代に入ると、復古思想が唱えられ『傷寒論』に準拠した実証主義に基づく古方派が創生され、江戸中

永吉の眼科 (千葉県茂原市上永吉732)

Yako CHIBA: Rare Old Books on Ophthalmology in Chiba University and Related Medical History in the Edo Period.

Nagayoshi Eye Clinic, Mobara 297.

Accepted November 22, 1996.

期には山脇東洋や吉益東洞が現れ、古方派医学が発展した。山脇東洋は刑場にて人体解剖を観察し、宝暦9年(1759)『蔵志』を著わした。その後両派の長所を融合しようとして折衷派(考証派)が生まれ、また蘭学の興隆にともなって、蘭方医学を修めた漢方医家により漢蘭折衷派が生まれたのである。

この医学史の流れは、眼科もまたその例外ではなかった。中国からの眼科専門書も多く輸入され、また後には国内でも版行されている。「龍樹菩薩眼経」『眼科龍木論』『銀海精微』『眼科全書』『審視瑤函』などがあげられる。

日本では眼科は早くから専門医が存在しており、鎌倉時代に土佐光長の筆と伝えられる「病草紙」には「目の病をつくらふくすし」として眼の手術の光景が描かれている。南北朝時代には尾張国馬島村明眼院の清眼大僧都により馬島流眼科が創始され、江戸時代まで多くの諸流が興った。それぞれ手術法や薬方に秘法秘伝を持ち、一子相伝門外不出として口述による伝授がなされ、秘密とされているところが多かった。その内容の一部はいくつかの秘伝書などとして、記録が残されており、本学にもいわゆる秘伝書が保管されている(『馬島流秘伝書』『麻嶋灌頂小鏡之巻』『玉泉流目伝書』『西島流眼科秘伝書』『青木流眼療書』『中川流眼科秘書』『八幡流眼科極秘書』『竹内家秘書』『家里一流相伝』『橋本流眼科秘用』など)。これらは当時の治療の中心であった漢方医療に基づいた眼科医療であり、漢方医療は心身の調和をはかりながら、つねに全身を一体として診断治療を行なうものであった。外用として点眼薬、洗滌薬、罨法薬、軟膏薬などがあったが、多くは内服薬として用いられた。

漢方医学における外科的療法の種類はあまり多くはなく、秘伝とされていたため、その記載も不完全である。元禄2年(1689)わが国初の眼科の刊本である『眼目明鑑』が刊行されたが、これには手術として瀉血(引刀と名づく、刀にて瞼の内面を截るなり)、切膜(上下の瞼及び白眼に膜覆うことあらば、引刀にて截るべし)、温金(烙鉄の極めて軽度のものなり)、熱金(烙鉄なり)、内障針(針にて内障を刺すなり)が記録されている。

漢方医学では経絡思想と、その物理的療法であ

る鍼灸療法もその診断治療の上で重要なものであった。幕府医学館で鍼の技術の練習、さらに実技試験に用いられた等身大の銅製の経穴銅人形が東京国立博物館に所蔵されており、また教材として用いられたと言われる小型の木製経絡人形(通称、『銅人形』)が、本学ならびに茂原市の千葉家にも保存されている。

この他の療法として、古くから眼病に関する禁好食物が挙げられており、禁物の主なるものは餅、酒、麺類、油、豆腐、生姜などで、好物としては小豆、鮑、イリコ、胡麻、牛蒡、鱈などがある。また、信仰や祈祷、呪術、呪法なども民間療法として伝えられていた。これらは非科学的ではあるが、精神的安定や心の拠り所として、ある種の心理療法とも考えられる。

この頃には解剖図はほとんど作られていないが、いくつかの絵巻物があり、本学にも所蔵されている[10]。眼球の解剖図としては、甚だ不完全ではあるが、寛保2年(1742)根来東叔の著書『眼目暁解』に当時の白内障手術(墜下法、撥下法)の際の経験から想像した眼球解剖図を掲げている。

西洋医学の影響

一方、西洋医学は安土桃山時代に、宣教師などによりキリスト教の伝道と共に伝えられ南蛮流と呼ばれていたが、キリスト教の禁止などにより、あまり発展はしていなかった(『南蛮流眼目秘伝書』など)。

江戸時代中期には長崎の出島において、オランダからの医術を学ぶものが現れ、それまでの伝統的な漢方医学に対し蘭方医学が始まったのである。その中で安永3年(1774)杉田玄白、前野良沢、中川淳庵らにより『解体新書』が刊行され、全身の解剖図が掲載しており、眼球の解剖図も示されている。解剖図の示された眼科書としては、京都の眼科医柚木太淳が眼球の解剖を行い寛政11年(1799)「解体瑣言」を著わし、また門人加藤隆徳による『柚木流眼科書』には眼筋、眼球内部構造が記載されている。また橋本流眼科を修めた衣関順庵は文化7年(1810)に『眼目明辨』を出版した。これには眼球構造に基づいた疾病分類がなされている。一方、ドイツ人プレンキ(Joseph

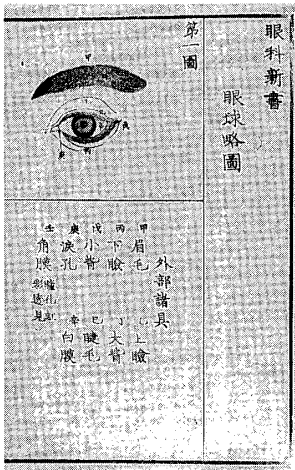


図1 眼科新書の解剖図 外眼部

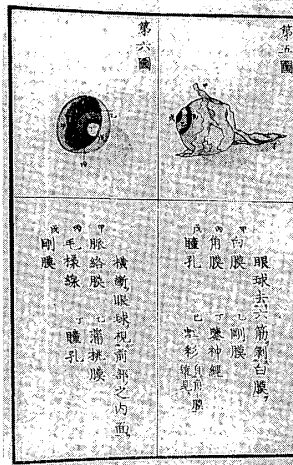


図2 眼科新書の解剖図 眼球および横断図

Jakob v. Plenck) の著書 “Doktorina de morbis oculorum” (ラテン語, 1777) のオランダ語訳 “Verhandeling over de Oogziekten” を宇田川玄真 (榛齋) が寛政11年 (1799) に翻訳した『泰西眼科全書』があるが, 版行はされなかった。これを杉田立卿が増補・改訂し, 自らの眼球解剖に基づいた詳しい眼球解剖図を添えて, 文化12年 (1815) に『和蘭眼科新書』『眼科新書』として刊行するに至った。本書の図はその後の眼科書にも多く引用され, また現在でも使用されている病名も多く収載されている。こうして, 経験的治療法が主体であった従来の東洋 (漢方) 医学から, より実証的論理的である西洋 (蘭方) 医学を学ぶものが多くなった。その後シーボルトの来日により, その門下から多くの優れた人材が輩出し, いよいよ西洋医学は興隆し漢蘭折衷時代を経て, 西洋医学中心の明治時代へと繋がっていくのである。特に幕末期, 眼科は外科と並んで西洋医学の禁止を免れたため, 漢蘭折衷派の眼科医の実力はとみに上がっていった。

漢蘭折衷時代の眼科医と著作

漢蘭折衷時代には多くの翻訳本や蘭方医学を学んだ医師達による著作が発行された。ここでは主だった眼科医と本学に所蔵されている著書について述べる。

山田大円は文化14年 (1817) に『眼科提要』を著わしたが, これはオランダ医書の訳本と漢方眼

科書とを参照し, 自己の臨床経験をまとめたものと言われる。次いで, 樋口子星は長崎に遊学した後大阪, 伊賀で開業し, その著書『眼科撰要』(文政9年, 1826) は, 上巻に『眼科新書』と同様の解剖図と, 眼病の図譜が掲載されている。中巻は薬方が記述されており, 漢方薬物治療が中心である。そして下巻には, 白内障の墜下法 (撥下法) などの手術や烙法などが記載され併せて手術道具が図解されている。この頃馬島流でも, 第28世円如僧正が長崎に遊学し, それまでの馬島流眼科に大改良を加え, 漢蘭折衷の実験的眼科を創めたとされる。著書に『眼科集要折衷大全』がある。

長崎に遊学した後, 武蔵国川越に開業した本庄普一は天保2年 (1832) に『眼科錦囊』, 天保8年 (1837) に『続眼科錦囊』を発行し, ここに漢蘭折衷眼科は大成したと言われる。光の屈折や網膜への投影図, 解剖図をはじめ眼科器械類, 白内障手術など多くの図が掲載されている。当時, 最も進歩的な眼科書である。天草の上田公鼎は仮腫

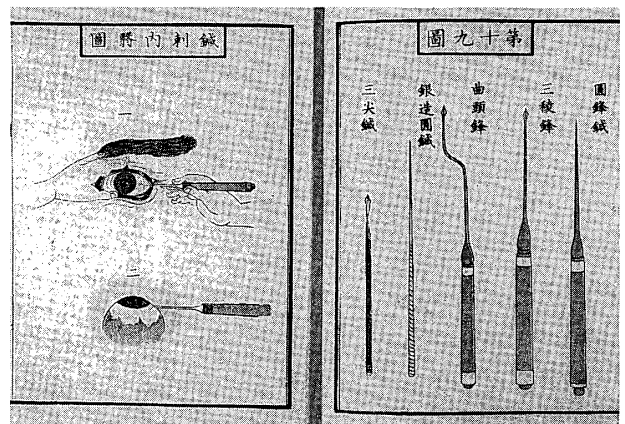


図3 続眼科錦囊より白内障手術と針



図4 目病真論より江戸時代の白内障手術風景

孔術を始めており、門人の安田玉海は天保13年(1842)に『眼科一家言』をまとめている。安房国の出身鈴木道順は白内障の手術に優れ、嘉永元年(1848)に『揆翳鍼訣』を刊行した。嘉永3年(1850)には中目橋山による『眼科方笈』『目病真論』があり、後者には当時の手術風景が描かれている。中川哲(明甫, 淡齋)著の『眼科要略』(文久3~元治元年, 1863~1864)は、この頃の眼科全書とも言うべき書で、当時の眼科医療を知る上で大変貴重である。その3巻に眼病と手術用具の図譜が彩色で掲載されている。

以上の如く幕末までに、多くの眼科書が出版される一方、西洋眼科書の翻訳も数多くなされている。

外国人医師の影響

シーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796~1866)は文政6~12年(1823~1829)長崎に滞在し、わが国の医学に多大な貢献をした。眼科領域では、散瞳薬の使用と虹彩穿孔術(光学的虹彩切除術)が伝授された。彼の講義の内容の一部は『失勃兒杜驗方録』がある。彼の影響を受け多くの優れた人材が輩出した。眼科医としては高良斎(著作に「西説眼科必読」ほか)や江戸の土生玄碩が有名である。玄碩は奥医師であったが、散瞳薬を教えられた謝礼に、葵の紋服を贈ったことが露見し、いわゆるシーボルト事件に連座した。著作に『癩祭録』があり、これを門人の時岡玄岱が補足した『銀海波抄』がある。

その後オランダの軍医ポンペ(Johannes Lydius Catherinus Pompe van Meerdervoort, 1829~1908)が来日し、安政4年~文久2年(1857~1862)長崎で医学教育に携わった。日本における近代的医学教育はポンペにより始まったと言われている。彼から教えを受けた松本良順をはじめ、多くの医師達が幕末から明治にかけて日本の医学界をリードした。J. Sichel 著の『Iconographie Ophthalmologique』はポンペが講義の参考にし、後に松本良順に贈った眼科書で、ポンペのサインがある。松本良順(1832~1907)は、佐倉に蘭学塾順天堂を開いた佐藤泰然の子で、後に幕府の医学所頭取となり、明治に入って初代

軍医総監になっている(著書に『養生法』がある)。『邦百氏眼科新説』はポンペが長崎の医学伝習所で行なった眼科の講義内容の筆記を転写したものとされる。この他ポンペの講義録としては『朋百実験通眼雑集』『眼科摘要』がある。

ポンペの後、オランダのウトレヒト軍医学校の教官であったボードイン(Antonius Franciscus Bauduin, 1820~1885)が、教え子であったポンペの後任として文久2年(1862)来日し、長崎の医学校で講義と治療を行なった。彼は第1回国際眼科学会へも出席した眼科医で、手術のほか斜照法、ヘルムホルツ検眼鏡の使用法や眼屈折など最新の学説を教授している。『鵬氏眼科書』『眼科新論』はその講義録である。

この後、マンスフェルト(蘭)、ヘボン(米)、ミュレル(獨)、シュルツェ(獨)、スクリバ(獨)らにより幕末から明治初頭にかけて眼科学が教授されている。

おわりに

医学史の研究にとって極めて貴重な本学の「東洋医学古書コレクション」は、これまで保管場所の問題もあり、決して良好な保存をされていたとは言いがたい。かなり大がかりな補修作業が必要なものも多数認められる。多くの時間と費用を要すると思われるが、三浦氏[10]も述べているように「大学の宝」として、保存されていくよう期待したい。また、亥鼻分館に一括して保管されるのを機会に、ぜひ詳細な目録が作られることを望みたい。

謝 辞

稿を終るにあたり、古書の収集、保存に多大な御尽力を下さいました故伊東彌恵治教授、故鈴木宜民教授をはじめ歴代の眼科学教室の方々、千葉大学医学部東洋医学研究会の皆さま、千葉大学附属図書館亥鼻分館の関係者の方々に厚く御礼申し上げます。また、日頃から親愛なる御助言を下さり、本稿の御校閲も賜りました眼科学教室安達恵美子教授に心からの感謝を表します。最後に、医史学への関心を引き出してくれた父・故千葉保

次に感謝します。

文 献

- 1) 千葉医科大学眼科学教室所蔵皇漢眼科書, 1939 (千葉大学医学部眼科学教室所蔵)
- 2) 日本医史学会展観品目録, 1939 (千葉大学医学部眼科学教室所蔵)
- 3) 長生郡鶴枝村 医学士 千葉彌次馬氏出品(目録), 1939 (千葉大学医学部眼科学教室所蔵)
- 4) 中泉行正: 本邦眼科に関する和漢医書文献, 日本眼科学会六十年史, pp.63-79, 日本眼科学会, 1956.
- 5) 高橋喜一郎: 東洋医学コレクションの紹介, 千葉大学附属図書館報 図書館の本 No.12, 1978.
- 6) 湯浅富士夫: 千葉大学附属図書館亥鼻分館の所蔵する貴重な蘭学資料—展示会開催にちなんで—, 千葉医学, 70: 343~347, 1994.
- 7) 富士川 游: 日本眼科略史, 1899 (富士川游著作集, 第1巻, 思文閣, 1980に再収載)
- 8) 小川剣三郎: 稿本日本眼科学史, 1904 (思文閣, 1962 復刻)
- 9) 福島義一: 日本眼科全書 第1巻 眼科史 第1分冊 日本眼科史, 日本眼科学会, 1954.
- 10) 三浦義彰: 旧佐倉順天堂所蔵の医書について, 千葉大学附属図書館亥鼻分館報 亥鼻分館ニュース No.6, 1980.



Nivice Aging
一人より二人

一つより二つ — ニバジールは脳循環改善作用を併せもつ
Ca拮抗性降圧剤です。

Ca拮抗性脳循環改善・降圧剤 (ニルバジピン製剤) **ニバジール錠** 2mg/4mg **Nivadir®** Tablets
R 特 要 指 健 保 適 用

●ご使用に際しましては
製品添付文書を
ご参照下さい。

製造発売元
フジサワ
大阪市中央区道修町3-4-7 千541
資料請求先: 藤沢薬品工業株式会社薬事本部
作成年月 1994年8月